附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み

附属桐が丘特別支援学校　　宮内 綾香

当校のオリンピック教育は、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行われている。今年度は、体育授業と行事を関連させた取り組みを紹介する。

１．東京都障害者スポーツ大会

例年、中･高等部のすべての生徒が東京都障害者スポーツ大会の陸上競技に参加している。4 月から 6 月初旬の大会当日まで、体育の陸上競技の単元のなかで練習を積み、その成果を発揮する場となっている。大会当日は、普段走ることのない陸上競技場で競技できるとともに、さまざまな障害そしてさまざまな競技レベルの選手と競技を通して交流を深めることができる機会となっている。また、競技結果によっては、表彰式でメダルが授与され、さらに 10 月に行われる全国障害者スポーツ大会の東京都代表に選出される可能性もある。多くの生徒がこの東京都障害者スポーツ大会を楽しみにしており、毎年それぞれが目標を持って 3 年間または 6 年間積極的に取り組む生徒の様子がみられる。競技を終えた生徒の表情はとても晴れやかで、自信になっている生徒が多いと感じる。自己記録の更新、メダルの獲得、そして東京都の代表など、それぞれの目標に向かって練習に取り組むなかで、生徒が卓越性を追求したり、努力することの喜びを味わったりすることができるのではないかと期待している。

今年度は、岩手県で行われた全国障害者スポーツ大会希望郷いわて大会の東京都代表に、中・高等部の生徒 4 名が選出され、陸上競技に出場した。練習会および遠征期間を通して他校や社会人の選手と交流を深め、心身ともに成長していく姿がみられた。

２．桐が丘祭（文化祭）

本校の桐が丘祭（文化祭）は、小学部の学習発表会と中・高等部による文化祭で構成されている。今回は、中学部の取り組みに焦点を当てて紹介する。

本校中学部では、例年、各学年に分かれて企画を考えている。今年度の中学部 1 年生は、「障害者スポーツを多くの方々に知ってもらいたい」との願いから、クイズ形式の劇で紹介する企画を立てた。授業で経験している競技だけでなく、これまでよく知らなかった競技や興味のある競技などを取り上げることにより、生徒自身が障害者スポーツに対する理解を深めることも目的とした。

まず、さまざまな障害者スポーツについて調べ、調べた中から「ボッチャ」「風船バレー」「ゴールボール」の 3 つを選んだ。この 3 つのグループに分かれ、さらに調べながらクイズ形式の劇を作っていった。ボッチャや風船バレーについては、体育の授業で取り組む生徒たちにとって馴染みのある競技であるが、ルールや歴史など新たな発見があり、理解が深まった。また、ゴールボールについては、リオデジャネイロオリンピックの日本選手団の活躍をテレビで見た生徒が多く、ぜひ体験してみたいという声が挙がった。そのため、附属視覚特別支援学校にご協力いただき、ゴールボールのボールを借用した。アイシェードで視界を塞ぎ、音を頼りに転がってくるボールを止めるという体験をし、その難しさやおもしろさを実感し、選手のすごさを口にする生徒が多かった。

桐が丘祭当日は、多くの来場者に集まっていただき、クイズに参加し劇を楽しみながら障害者スポーツに対する理解を深めていただくことができた。

この活動を通して、生徒たちは障害者スポーツに対する理解を深めるとともに、視覚障害者のスポーツを体験し、視覚障害者への理解を促す契機となった。

3．全国特別支援学校ボッチャ大会（ボッチャ甲子園）

当校では、小学部から高等部まで 12 年間を通して、体育でボッチャを扱っている。ボッチャは赤・青それぞれ 6 球ずつのボールを投げて、ジャックボール（目標球）にいかに近づけることができるかを競うもので、最も重度な肢体不自由を有する人が参加できるパラリンピックの正式種目にもなっている。

今年度から全国特別支援学校ボッチャ大会（ボッチャ甲子園）が開催されることが決定し、当校から高等部の生徒 4 名が参加した。3 人 1 組のチーム戦で、予選リーグ全勝で決勝トーナメントに進出、授業での学習の成果を発揮し、初代チャンピオンの座についた。全国特別支援学校ボッチャ大会が開催されることで、児童生徒の目標となり、今後の児童生徒の取り組みに変化がみられるのではないかと期待している。また、競技中の真剣なまなざしとは違い、競技後の生徒の表情は自信に満ちている。この大会に出場した選手たちが、それぞれ次の目標に向かって切磋琢磨し合い、2020 年東京パラリンピックで活躍することを期待したい。

4．高等部ハンドサッカー部活動

例年 2 月に、東京都の肢体不自由特別支援学校が集まり、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会が行われる。この大会に向けて、当校の高等部では年間を通じて活動を行っている。コートや道具の準備をしてくれている人の存在があって大会が成り立っていることを意識し、年度はじめは部員でコートをつくることから始まる。よりよい成績をおさめるために、チーム一丸となって練習に励むことが、卓越性の追求や努力することの喜びにつながっている。また、日々の活動や他校との練習試合を通して、チームで協力する態度や公平に試合にのぞむ態度など、他者への尊敬やフェアプレイについても指導を行っている。

これらの取り組みを重ねていくなかで、2020 年の東京オリンピックを意識し、主体的に関わっていきたいという想いが感じられるようになってきた。なかでも、全国特別支援学校ボッチャ大会に高等部から 4 名の生徒が参加し、初代チャンピオンの座についたことで、パラリンピアンと交流する機会をいただき、生徒たちにとってよい刺激になった。そして、2016 ジャパンパラ陸上競技大会 T37 クラスの 100m、200m、400m に出場し、3 冠（日本新含む）を飾った高等部 2 年女子生徒は、パラリンピック出場に向けて、本格的に取り組んでいる。12 月に開催された共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集いにおけるスポーツ交流には、本校の小・中・高等部の児童生徒が自主的に参加し、馴染みのあるボッチャを通して、障害の有無、障害の種類に関係なく交流ができることを実感していた。また、当校には、9 月下旬にアメリカ・シンシナシティで開催された第 12 回世界ラート競技選手権大会に日本代表チームのキャプテンとして出場し、シニア団体で銀メダルを獲得した教諭がいる。理科教諭として勤務に専念する一方で、競技者として現状に満足せず挑戦し続ける姿は、児童生徒の大きな励みになっていると感じる。

今後も、学校の教育活動全体でオリンピズムや国際平和等について、学ぶ、行う、観る、支えるというそれぞれの視点で、児童生徒の意識を高めていけるよう実践に努めていきたい。